

言葉と音楽の出会い：
R.シュトラウス『ばらの騎士』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鶴間, 圭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008200

言葉と音楽の出会い

—R. シュトラウス『ばらの騎士』をめぐる— (講演録)

鶴 間 圭

みなさん、こんにちは。今日はリヒャルト・シュトラウスのオペラ『ばらの騎士』について、映像を交えながらお話いたします。『ばらの騎士』全曲は3時間以上かかってしまいます。今日は時間が1時間半しかありませんので、映像の方はとばしとばしになってしまいますが、ご了承ください。見どころ聴きどころを中心に、言葉と音楽の関心に注目しながら、話を進めていこうと思います。

まず、簡単にシュトラウスと『ばらの騎士』についてお話ししておきましょう。リヒャルト・シュトラウスは1864年に生まれ、1949年に亡くなったドイツの作曲家です。古典派とかロマン派とかいう時代区分で言いますと、後期ロマン派に当たります。19世紀にはワーグナーという大オペラ作曲家、大変な巨人がおりまして、その跡を継いだ作曲家は偉大な先人のために、非常に苦勞してもがき、葛藤した。ワーグナーに匹敵するような作品を作ろうとして、結局その模倣、亜流に終わってしまった作曲家はたくさんいました。その中でほとんどただ一人成功したと言っているのが、シュトラウスなのです。シュトラウスはワーグナーの影響を大きく受けていますし、ワーグナーの音楽書法を取り入れているのですが、決してその模倣に終わらず、あるいはワーグナーの影響に押しつぶされてしまうことなく、独自の音楽を作っていた人ですね。もっとも、シュトラウスの言葉によりますと、謙遜と言いますか少し誇張しているところもあるとは思いますが、ワーグナーは巨大な山で、その巨大な山を乗り越えることは絶対にできない。そこでどうするかというと、自分は迂回して行くのだと言っております。それは賢明なやり方だったんですね。ワーグナーの音楽書法を用いながらも、モーツァルト的な要素も取り入れたり、あるいは自分独自のものを付け加えたりして、シュトラウス・ワールドを作り出したのです。

シュトラウスのオペラは全部で15曲あります。その中で、『ばらの騎士』は特

に有名で上映回数が最も多く、ヨーロッパのオペラ劇場では最も人気のある演目の一つです。台本を書いたのはフーゴー・フォン・ホーフマンスタールという大詩人です。シュトラウスとホーフマンスタールはある時出会い、ホーフマンスタールは元々詩人なのですが、オペラの台本を書くことに非常に興味を示し、熱中したのです。そして、二人は手紙をやり取りしながら作品の制作を続けていった。その手紙、往復書簡はたくさん残っていて、今も私たちは作品の創作過程を知ることができるのです。昔の人は手紙を非常にマメに書いていて、後世に生きる私たちにとっては非常にありがたいものです。今は電話やメールなどで簡単にやり取りができてしまうわけですが、それでは後に残らないですね。ところが、この時代は手紙ですから、かなりのものが残っています。もちろん失われてしまったものもありますけど。そうして作品の創作過程を知ることができる。シュトラウスのオペラのうち、最初の2曲はあまり成功せず、ほとんど上演されません。3曲目が『サロメ』、これはオスカー・ワイルドの台本を、フランス語からドイツ語に翻訳したものに楽曲を付けて、大センセーションを起こしました。内容も過激です。サロメがヴェールを1枚ずつ脱いで最後は裸になるという、当時はオペラの舞台でそういうことをやるのは大スキャンダルだったのです。そして、シュトラウスは一躍時の人になったのです。その次に作ったのが『エレクトラ』、そこで初めてホーフマンスタールとの共同制作が始まります。その『エレクトラ』は今では名作と言われていますが、当時は過激すぎるというか、音楽も先鋭的すぎて賛否両論だったのです。その次にシュトラウスとホーフマンスタールが手掛けたのが、この『ばらの騎士』です。作曲されたのが1909年から1910年にかけて、シュトラウスが45、6歳の頃、ちょうど一番脂の乗り切った時期です。この作品で、シュトラウスは作風を大きく変えました。前作『エレクトラ』のような刺激的、先鋭的な音楽ではなく、もっとロマンティックで陶酔的で、柔らかい響きを持っています。ワーグナー風の重厚な音楽から離れ、モーツァルト風の軽やかな音楽を目指したのです。物語もモーツァルトの『フィガロの結婚』のいわば後日談とも言えるもので、明らかに「第二のフィガロ」を意識していました。この作品はドレスデンで初演され、大成功を収めました。最初の頃はベルリンから専用の列車を出して、それに乗って多くの人が聴きに来るといぐらいの大ヒット作品になったのです。お手元の資料のあらすじを見ていただくと分かるように、結構きわどいお話なんですね。冒頭から元帥夫人が若い男を部屋に入れて不倫をしているという設定ですから。初演当時は不道徳などとも言われましたが、あんまりいやらしさ

は出てこないで、きわどい話をヴェールにくるんで洗練させている。その辺がオペラならではの特徴と言いますか、音楽の力によって洗練されたエロティシズムを醸し出していると思います。

それでは映像を見ていきましょう。まず最初に前奏曲があります。前奏曲はオーケストラだけで演奏され、まだ幕は閉まっています。その幕の向こうでは元帥夫人と17歳のオクタヴィアンが夫人の部屋で一夜を明かしています。その様子を音楽で非常に洗練された形で描くのです。シュトラウスの音楽には、ライトモチーフというある特定の人物や物事を表す音型があって、例えばオクタヴィアンのモチーフや元帥夫人のモチーフなどをいろいろ組み合わせて音楽を作っていくのです。その前奏曲、冒頭いきなりホルンの強奏で、(ピアノ演奏、譜例1a)と始まります。これは非常に元気のいいモチーフで、オクタヴィアンを表しています。若いオクタヴィアンが元気いっぱい突進している。続いて、それを包み込むようなモチーフが出てきます(ピアノ、譜例1b)。これが元帥夫人ですね。それに対してすぐに(ピアノ、譜例1c)とまたオクタヴィアン、そして(ピアノ、譜例1d)と包み込むように元帥夫人です。これが何を表しているかは皆さんお分かりですね。そのあと二人がもつれ合うように(ピアノ、譜例1e)という風に、音楽がどんどん盛り上がっていきます。

Klavierauszug von
Otto Singer.

Stürmisch bewegt. Metr. $\text{♩} = 60$

1

Piano.

1a *Con moto agitato.* *f*

1b *ff*

1c

1d *ff*

1e *agitato und sehr über-
♩ = 68.1* *f*

schwänglich im Vortrag. *mf*

そして、クライマックスのところではホルンが（ピアノ、譜例2a）と鳴ります。これも何を表しているかお分かりですね。言いませんけど。そしてそのあと（ピアノ、譜例2b）とズルズルと下がる感じになります。そこでことが終わるわけですね。

しばらくすると（ピアノ、譜例3）となり、これは元帥夫人の諦めの気持ちを表しています。

第2幕以降で、オクタヴィアンは若い女性を見つけ、彼女の方へ行ってしまふ。元帥夫人がそれを予感して、悟ったようなモチーフ（ピアノ、譜例4）が出てきます。

そして幕が開きますと、朝ですから、シュトラウスの描写のうまいところですが、鳥の声も聞こえてきます。シュトラウスのオーケストレーションは大変見事で豊潤なものなので、ピアノではうまく弾き切れないのですが、今言ったようなモチーフが組み合わさっているということを頭に入れてお聴きください（DVD鑑賞）。指揮はヘルベルト・フォン・カラヤンで、彼がまだ52歳の1960年、ザルツブルク音楽祭の祝祭大劇場のこけら落としの際の上演です。オーケストラはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団。元帥夫人を歌っているのがエリーザベト・シュヴァルツコップという当時の大歌手ですね。オクタヴィアンはちょっと17歳には見えないかもしれませんが、その辺はオペラ歌手なので仕方ありません。

二人は昨夜の余韻に浸っています。そうすると、隣の部屋で物音がするので、夫の元帥が帰って来たのではないかとびっくりして、オクタヴィアンはあわてて物陰に隠れるのですが、やって来たのは田舎にいる従兄（いとこ）のオックス男爵です。オペラの中では、当時のウィーンでは結婚する際に花婿が花嫁に使者を送って銀のばらを渡すという風習があったという設定になっています。この設定自体が架空のものなのですが、オックスは貴族の娘のゾフィーとの結婚が決まったということで、銀のばらを届ける「ばらの騎士」を誰にしようかと元帥夫人に相談に来たのです。オックス男爵は貴族のイメージとはだいぶ違いますね。オクタヴィアンは小間使いに変装していますが、オックス男爵は好色ですぐに色目を使います（DVD）。今のところでオックス男爵のモチーフが聞こえましたが、（ピアノ、譜例5）というような野暮ったくて勿体ぶった感じですね。



ただ、伝統的な演出ではオックス男爵は大体こんな、中年の好色な親爺という感じなのですが、実はシュトラウスとホーフマンスタールが考えていたオックス男爵はこんなではなかったんですね。みなさん、このオックス男爵は何歳だと思いませんか。どう見ても40代半ばより上に見えますよね。実は構想では彼は35歳なんですね。シュトラウスは後にオックス男爵についてこう語っています

す。「ほとんどのバス歌手はこれまでこの役を、ぞっとするような化粧とプロレタリア風の所作によって、醜悪で下品な化け物のように演じてしまった。これは全く間違いである。オックス男爵は田舎のドン・ファンであり、35歳くらいの美男子である。粗野ではあっても、とにかく貴族なのである。内面的にはいかがわしくても、少なくとも外見は立派な風采をしている」。このオペラの題名は『ばらの騎士』ですが、なんと最初の構想の段階では彼の本名の『オックス・フォン・レルヒェナウと銀のばら』という題名になるはずだったのです。主役である以上、シュトラウスとホーフマンスタールがオックスを、非常に丁寧に愛情を込めて描いたということがわかりますね。なぜ人物像が変わってしまったのかと言うと、初演時の演出がずっと後を引いて、伝統的に残ってしまったのですが、初演にシュトラウスとホーフマンスタールは立ち会っているのに、なぜ直そうとしなかったのかはわかりません。ただ最近では、当初意図していたようなカッコいいオックスも出て来ました。オックスはダサくて野暮ったくて、オクタヴィアンはカッコいいというイメージが一般化しているのですが、今年の夏のザルツブルク音楽祭の演出では、オックスの方がオクタヴィアンよりもカッコいい。オクタヴィアンは17歳という設定を生かして、何となく子供っぽいというか、頼りない、まだ垢抜けていないという感じで、オックスの方が人間ができているという印象でした。この時の映像はついこの間NHKのBSで放送されていますので、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。

さて、オックスは結婚するに当たって、花嫁に銀のばらを届ける「ばらの騎士」を誰にしたらいいかと相談に来たのです。そこで元帥夫人はいたずら心から、「オクタヴィアンにしましょう」と自分の愛人を指名してしまうんですね。結局オクタヴィアンが「ばらの騎士」に選ばれます。すると、その部屋に大勢の人がやって来まして、元帥夫人の朝の謁見が始まります。やがて、大勢の人とともにオックス男爵も帰って行きます。

部屋には元帥夫人だけが残り、私も年を取ったと、物思いにふけります。この場面がこのオペラの大きな聴きどころで、歌詞も素晴らしい部分です(DVD)。元帥夫人が嘆き物思いにふけるモノローグが終わり、オクタヴィアンが正装して戻って来ます。オクタヴィアンはさっきは小間使いの格好をしていましたが、どさくさに紛れてどこかに行ってしまうんですね。そして、正装してまた戻って来る。先ほども言いましたが、オクタヴィアンは17歳の青年で、歌っているのは女性歌手です。これは宝塚と同じですね。オペラでは17、18世紀にはカストラートという去勢をした男性歌手が非常に人気があって、女声の音域の高い

声で英雄などの役を歌っていた。18世紀の終わり頃になると、オペラでカストラートが活躍するのは少なくなるのですが、モーツァルトの『フィガロの結婚』ではケルビーノという思春期の男の子の役を、女性歌手が歌います。『ばらの騎士』でもオクタヴィアンを女性歌手の役にして、大成功した。しかも、ここでは男性のオクタヴィアンが小間使いの女性に変装する場面もあって、それを女性歌手が演じるという非常に倒錯した状況になっています。

元帥夫人は凜々しいオクタヴィアンの姿を見て、またも自分の年を感じ、いつか彼は自分から離れてしまうんだという思いを強める。みなさん、元帥夫人は何歳だと思いますか。実はかなり若くて、設定では32歳です。これは18世紀のウィーンの話ですから、現代とは感覚が少し違いますね。現代の感覚で言うと、39歳ではないかと私は以前に書いたことがあります。すると何となくイメージがつかめるのではないかと思います。決してそんなに年を取ってはいないんですね。これに関してシュトラウスは、「元帥夫人はせいぜい32歳の若く美しい女性でなければならない。彼女は機嫌が悪い時にふと、17歳のオクタヴィアンに対して自分が年取った女だと感じるのである。美しい元帥夫人にとってオクタヴィアンは最初の恋人でも最後の恋人でもない」と述べています。そして、第1幕の幕切れです。オクタヴィアンが入って来て、また二人の会話になるのですが、オペラの台詞（せりふ）としては非常に内省的な、哲学的な台詞が出てきます。普通のオペラの台詞というのは単純明快なものが多いのですが、ここでは嘆きの中に時間に関する哲学的な考察が入るのです。「時というものは不思議なもの。何気なく生きているときには何とも思わないもの。でも突然、時のことしか感じられなくなるの。私たちのまわりにも、私たちのなかにも、顔のなかにも、鏡のなかにも、私のこめかみのなかにも、時は流れているの。あなたと私の間にも時は流れてゆくよ。音もなく、砂時計のように」。そして彼女は、時々夜中に起きて部屋中の時計をみんな止めてしまうと言う。そこにシュトラウスは時計の刻む音を入れている。そしてくすんだ感じの物思いにふけるような和音が続く（ピアノ、譜例6）。

6. (leise.) 311 141

Marsch

halt-sam. Manchmal steh ich auf mit-ten in der Nacht und laß die

Uh-ren al-le, al-le stehn. Al-lein, man muß sich auch vor ihr nicht

...

そして、オクタヴィアンに向かって「あなたはいつか私より若くて美しい人のところへ行ってしまおうわ」と言うところで（ピアノ、譜例7）、若く美しいイメージの和音が出てくる。

ト長調の和音

7

Marsch

jün-ger und schö-ner ist als ich. Octavian.

Wilst Du mit Wor-ten mich von dir

con moto appassionato.

espr.

ppp

sf

この和音は印象的で際立っています。シュトラウスの音楽の素晴らしいところですね。これはト長調の和音ですが、このト長調という調は第2幕以降でオクタヴィアンが恋をするゾフィーの調でもあります。それをこのたった一つの和音で暗示しているんですね（DVD）。非常にきれいなト長調の和音で、それまでもやもやとした音楽が続く中でポーンとこの和音が出てくるのが非常に印象的です。そして元帥夫人は物思いにふけたままで、オクタヴィアンは何か元気づけようとするんですが、なすすべなく立ち去って行きます。そして幕切れ（DVD）、ここで出て来る黒人の男の子は元帥夫人の家の召使いです。当

時はこういう黒人の幼い男の子に貴婦人の身の回りの世話をやらせていた風習があったのです。実はこの男の子は第3幕の最後でも重要な役割を果たします。この第1幕の幕切れは、シュトラウスの言葉では「人生の悲劇的な別れといった感傷的な調子になってはならず、ウィーン風な優雅さと軽やかさをもって、片目だけで泣くように演じなければならない」という場面です。

それでは第2幕へと行きましょう。第2幕は花嫁のゾフィーの家、父親はファニナルという新興貴族で、オックス男爵はゾフィーに「ばらの騎士」を送ります。ゾフィーは15歳という設定です。「ばらの騎士」の登場です（DVD）。ところどころに入る木管とチェレスタの響きが銀のばらの独特の輝きを表しています（譜例8）。

8 25 Octavian (etwas starkend)

Mitt. ♩ = 84 銀のばら Mir ist die Ehre wider-

dolce espr. pp pp

fahren, daß ich der hoch und wohlgeborenen Jungfer Braut, in meines Herrn

オクタヴィアンとゾフィーは一目で恋に落ちてしまうのですね。そこへオックスが入ってきて、相変わらず粗野な振る舞いをするので、ゾフィーは失望する。そして、オクタヴィアンはゾフィーを守るために剣を抜いてオックスを傷つけてしまう。大した傷ではないのにオックスは大騒ぎをして、オクタヴィアンは出て行かなくてはなりません。オックスが大袈裟に痛まっている間に、オクタヴィアンとその仲間たちが陰謀を企み、第1幕の小間使い、実はオクタヴィアンが女装した小間使いですが、「今夜逢いましょう」という手紙をオックスに届けます。好色なオックスは早速喜び、さっきまでの傷の痛みも忘れて、ワルツを踊り出します（DVD、譜例9）。



第3幕になりますと、手紙をもらったオックスがいかかわしい料理屋へおびき寄せられ、そこで待っているのは、小間使いに変装したオクタヴィアンでして、大騒ぎになります。オクタヴィアンは事前に綿密な準備をしていて、さんざんオックスをからかい、翻弄するのです。ただ、あまりに大騒ぎになり、オックスが警察を呼ぶと、本当に警察がやって来てしまう。その騒ぎを聞いたゾフィーと父親もやって来る。そこでオックスは浮気がばれてしまい、非常に立場が悪くなる。さらに、元帥夫人もやって来て、オックスに諦めて帰りなさいと言うのです。ここで面白いことが起きるのですが、小間使いの格好をしていたオクタヴィアンがまた着替えて戻って来る。つまり、小間使いがオクタヴィアンであるということがみんなにばれてしまうわけですね。そして、なぜその小間使いが元帥夫人の部屋にいたのかということになります。そこでみんな事情がわかってしまうのですね。しかし、そこは貴族の流儀で、誰も迫及しない。当時の貴族というのは、家同士の結婚、いわば政略結婚ですから、恋愛結婚などまずない。だから男は外に行って遊んでいるし、女性は元帥夫人のように欲求不満に苦しんだり、愛人を作ったりもしていた。そういうのを騒ぎ立てずに、見て見ぬふりをするのが貴族の流儀だったのです。オックスは花嫁を諦めますが、しかし意気揚々と帰って行きます。そして残ったのが、元帥夫人、オクタヴィアン、ゾフィーの三人。元帥夫人はオクタヴィアンとゾフィーの間に流れる感情に気付いています。そこで彼女は潔く身を引いて、若い二人を祝福して立ち去ろうとする。ここで三人の三重唱となり、元帥夫人は「私は彼を正しい愛し方で愛そうと決めていた。彼が他の誰かを愛しても、それでも愛そうと思っていた」と歌います（DVD、譜例10）。

10. 265

Marsch

p

— mir's ge-lobt, ihu lieb — zu ha-ben in der rich-ti-gen Weis,— daß ich

Moderato e molto sostenuto.
Mäßig langsam und sehr getragen.
 Metr. ♯ = 78

p

A. 69113 F.

父親が入って来て、「若い人はこういうものなんですネ」と言うと、元帥夫人は「そう、ね」と言って立ち去って行くのです。残った二人は、愛の喜びに浸って、愛の歌を歌いますが、今まで非常に陶酔的で豊潤だった音楽が、ト長調に転じて（またト長調です）民謡のような素朴できれいなメロディが流れます（DVD、譜例11）。

11. Sophia.

p

Ist ein Traum, kann nicht wirk-lich sein, — daß wir zwei bei- ei - nan - der sein, —

Octavian.

Spür' nur dich, spür' nur dich al - lein — und daß wir bei- ei - nan - der sein!

Metr. ♯ = 69
ruhig gehend (Andante tranquillo)

pp

ゾフィーがハンカチを床に落としていき、第1幕の最後に出て来た黒人の男の子がそれを拾ったところで、全曲の幕が降ります。

シュトラウスとホーフマンスタールは性格も違いますし、芸術の方向性も決して同じではなかった。しかしこの二人は約20年間オペラを作り続け、全部で6曲のオペラが生み出されました。なぜこの二人は、時に激しい対立をしながらも20年間も共同制作ができたのか。一流の芸術家というのは個性が強いので、仲よくするのは難しいのですが、その中でなぜ二人は協力して傑作を生み出したのでしょうか。シュトラウスは言葉に靈感を受ける人だったのです。言葉を見ると音楽のインスピレーションが湧いてくる。言葉に導かれて作曲するのです。一方ホーフマンスタールは、「詩人がいくつもの言葉を並べて表現する思い

を、作曲家はたった一つの和音で表現することができる」と述べ、言葉では表現しえないものを音楽の表現に託した。そうして、二人の芸術家の最終的な目標が一致して、『ばらの騎士』という芸術史上稀にみる作品が生まれたのです。

オペラとは非常に贅沢な芸術ですよ。オーケストラがあって、豪華な舞台装置があって、上演に非常にお金がかかるものです。実演を見に行ければ一番いいのですが、チケットも高いですから、放送があった時や、あるいはDVDで、興味があったらご覧いただきたいと思います。本日はありがとうございました。

* 本稿は、2014年12月2日に静岡大学大学会館ホールで開催された翻訳文化研究会主催講演会「言葉と音楽の出会い—R. シュトラウス『ばらの騎士』をめぐって—」の講演記録である。本講演会には「ヨーロッパ言語文化基礎論Ⅰ」の受講生を中心に、地元市民も含め110名ほどの参加があった。司会は翻訳文化研究会の安永愛が担当し、講演の文字起こしについては静岡大学人文社会科学部言語文化科学学生の佐藤大樹さんが担当した。誌上掲載用に鶴間圭氏が譜例を付加され、講演録全体のチェックを行っていただいた。

静岡大学翻訳文化研究会主催講演会



言葉と音楽の出会い
—R.シュトラウス『ばらの騎士』をめぐって—

講師：鶴間 圭（音楽評論家）



2014年12月2日（火）
14: 25～15: 55
静岡大学(静岡キャンパス)
大学会館3Fホール
14時開場
入場無料・申し込み不要
お問い合わせ
kanrou@ipc.shizuoka.ac.jp (安永愛)

生誕150周年を迎える作曲家リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)のオペラ「ばらの騎士」。オペラの最高傑作と称えられるこの夢遊れる作品の魅力について、ピアノ演奏や映像を交え、存分に語っていただきます。言葉を音楽的靈感のよりどころとしていたシュトラウスと、言葉に表現しえないものを音楽に託した文豪ホーフマンスタール。二人の共同制作秘話もお楽しみに。

講師プロフィール
1960年生まれ。東京大学法学部卒業。慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。ミュンヘン大学にて音楽学専攻(主にリヒャルト・シュトラウス、ワーグナーの作品研究)。共著書に『スタインダールオペラ鑑賞ブック ドイツのオペラ(上・下)』『オペラ・キャラクター—解読事典』にリヒャルト・シュトラウスの「実録」(音楽之友社)など。

翻訳文化研究会主催講演会
「言葉と音楽の出会い—R. シュトラウス『ばらの騎士』をめぐって—」のチラシ